

もやもや病における抗血小板薬の有用性について

慶應義塾大学 医学部 神経内科

大木宏一，高橋慎一，鈴木則宏

研究要旨

もやもや病における抗血小板薬の有用性に関しては明らかなエビデンスはなく，今後その有用性を検討することはもやもや病診療において重要であると考えられる．本年度は，もやもや病における抗血小板薬投与のエビデンスを構築することを目指し，その第一段階として，全国の脳卒中診療専門施設でのもやもや病に対する抗血小板薬の使用実態や使用方針を把握する調査を予定した．調査票の送付・回収と結果の解析は次年度に行う予定である．

A. 研究目的及び背景

もやもや病の治療に関しては，近年発表された JAM trial 等の外科的治療に関するエビデンスが蓄積されつつあるが，内科的治療，特に抗血小板薬の投与に関しては明白なエビデンスがなく，その使用は各施設や診療科，そして担当医師の判断により行われているのが実状である．

レジストリー研究においても抗血小板薬の使用について項目が設けられている場合もあるが，それ自体に焦点をあてたものではないため，情報の質や量が不十分なことが多い．本研究班においても 2005 年度において，もやもや病データベースの情報を基に抗血小板薬の投与と中枢神経系イベントの発生を比較したが，

データベース情報だけではその 2 つの時間的因果関係が不明であり，「イベントが発生したために抗血小板薬を開始した」のか，「抗血小板薬を使用していたにもかかわらずイベントが発生した」のかを検討することができず，抗血小板薬の有効性を比較することはできなかった¹⁾．

翌 2006 年度では上述の点を回避するため，抗血小板薬の投与と中枢神経系イベントの発生の時間的因果関係がわかるような詳細なアンケート調査を施行したが，回答数が少なく明確なエビデンスは示すことができなかった²⁾．

今後，もやもや病での抗血小板薬使用を焦点とした大規模前向き観察研究や介入研究が必要となると考えられるが，今回はその前段階として，全国の脳卒中診療専門施設におけるもや

もや病の治療方針に関するアンケート調査を行うことを検討した。

B. 研究方法

対象施設は、悉皆性を保ちつつ脳卒中診療の専門性も考え、全国の「日本脳卒中学会認定研修教育病院」765施設とした。各施設に下記の項目を記載した質問票を郵送する予定である。

(次年度4月に郵送、その後回収、結果の解析を行う。これらの項目に対する回答に際しては、診療録閲覧の必要性が低く、倫理指針に照らし各施設において倫理申請を行う必要性はないと考えている。)

質問票内容

1. もやもや病診療の担当科 (内科, 外科等)
2. もやもや病の年間診療数 (概数)
3. その中での抗血小板薬使用症例数 (概数)
4. 下記の項目に関するその施設の治療方針
 - 虚血発症もやもや病症例での抗血小板薬使用の是非
 - 無症候性もやもや病症例での抗血小板薬使用の是非
 - 出血発症もやもや病でその後虚血発作を認めた場合の抗血小板薬使用の是非
 - 使用する抗血小板薬 (または脳循環改善薬) の種類

C. 結論

次年度においては、今回の使用実態調査の結果を解析し、今後の前向き研究のデザインを検討する予定である。

D. 文献

1. 鈴木則宏, 山口啓二, 高橋一司, 高尾昌樹, 野川茂. 2005年度 モヤモヤ病 (ウィリス動脈

輪閉塞症) 調査研究班データベース集計. 厚生労働省・ウィリス動脈輪閉塞症における病態・治療に関する研究 (班長 橋本信夫) 平成17年度総括・分担研究報告書. 2006:15-18.

2. 大木宏一, 星野晴彦, 鈴木則宏, 野川茂, 山口啓二. 2006年度 モヤモヤ病 (ウィリス動脈輪閉塞症) 調査研究班データベース集計. 厚生労働省・ウィリス動脈輪閉塞症における病態・治療に関する研究 (班長 橋本信夫) 平成18年度総括・分担研究報告書. 2007:19-25.

E. 知的財産権の出願・登録状況

なし